

2学年通信 18号

配信は続くよ どこまでも 2

2年生の皆さん、皆さんからの返信(休業中の様子について)が少しずつ届いています。「振り返ること」と、それをあえて「人に示すこと」は大切です。まだの人は早めに返信してください。

返信をすぐに返す人だからかもしれませんが、皆さんの臨時休業中の生活は、概ね良好なようです。まとめると具体的には以下のような内容です。

- ① 起床時間や就寝時間を守るよう努め規則正しい生活を保とうとしている。
- ② 舟入高校のホームページをよく閲覧していて、「受験体験記」に大いに刺激を受けている。
- ③ 夕方から夜の学習は思い通りできていない人が多い。
- ④ 春の課題はまだ終わっていない人が多い。学習時間を増やしていかなければ課題が終わりそうにないというあせりや、長期にわたる休業からの回復に不安も感じている。
- ⑤ 課題以外には、ターゲットをやっている人が多い。
- ⑥ 大学研究は時間に余裕があり、いろいろ調べることができ、モチベーションが上がっている。
- ⑦ 運動不足を多くの人が実感している。
- ⑧ 保護者の方からは、主体的に取り組み受験生としての覚悟が感じられ、応援して行きたい旨のコメントが多く寄せられています。ご記入、返信ありがとうございます。

●大学卒業式の式辞に学ぶ

ここ数日は、多くの大学で卒業式が予定されていましたが、この度は中止や規模の縮小などを余儀なくされてしまいましたが、小人数での卒業式の様子や、総長の式辞などはライブ配信されています。皆さんの志望大学の卒業式はどのように発信されていますか。是非、興味関心をもって閲覧してください。

大学総長の式辞は世間的にも注目が高いものです。それは、その式辞に、時代の課題についての大学のメッセージがはっきり示されているからだと思います。「知の拠点」「知のリーダー」である大学のメッセージは、そのまま、若い皆さんの未来への指針になるはずです。

例えば、皆さんが2月に取り組んだ「志望理由書」の中でしっかり考えて書かなければいけないことのヒントや、あるいは、「課題研究発表」で指摘された私たちの課題に通じる問題があるなど、思っていくつかの大学の総長の式辞を読みました。

その中で、特に印象的で感銘をうけた内容を紹介します。

◆「ノイズのソムリエ」をめざして◆

昨年のホームカミングデーにお招きした、養老孟司先生の言葉が印象的でした。情報技術における個人認証についての話題のなかで、「私とは何者かを識別するのは、私自身もつ固有のノイズである」といったことを語られました。高度に複雑である有機的な統合体が、その本来の機能を発揮するには、その有機体が内包する多様な要素が連関している必要があります。それらは異物と見えるかもしれませんが、他者と関わりのなかで時に必要になるものなのです。結論を急ぐ立場からは、そのような多様性は、面倒なノイズに見えるかもしれませんが、個に固有の本質が書き込まれていて、それがさらに高度な多様性を生み出し支えるのです。その違いやズレを見落とさずに、ノイズを読み取るには、感性と想像力が必要です。その育成は、排外主義や自国第一主義が目立つ現代だからこそ、より重要になってきているのではないのでしょうか。個の違いに対する鋭敏で豊かな感受性は「包摂性」を追求する上で、不可欠の前提なのです。

耳に逆らう異なる意見も、異質で多様な他者との遭遇も、これまで以上に大きな役割を果たす、と私は感じています。「知のプロフェッショナル」である皆さんには、言語が決して透明な道具ではないこと、知の作法が固定的で決まりきったものではないことを、いつも意識してほしいのです。そして言語がときに生み出す「ノイズ」を冷静に感知し、賢くしかも創造的に対応できるような感性を、さらに磨いていってください。これは、まだまだ人工知能にはできないことです。ノイズの中には、大発見に結びつく宝があるかもしれません。それを見分けられるような、いわば「ノイズのソムリエ」を目指してもらいたいのです。そして地球と人類社会の持続可能な発展に貢献してほしいのです。

(3月24日 令和元年度東京大学学位授与式総長告示) 東京大学HPより引用

<https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/schools-orgs/index.html>

◆新しい成長の形「インクルーシブ・グロース」◆

今年1月にスイスで行われた、世界経済フォーラム、いわゆるダボス会議の議論は印象的でした。地球環境問題の顕在化は、これまでの拡張主義的な経済成長の限界を

示しています。人類社会が、地球環境と調和的で、**持続可能な発展**を図るためには、「**成長**」の意味を考え直す必要があります。そこで強調されていたのが、「**No one will be left behind**」、どんな人も取り残さない**包摂性**であり、その包摂性のなかで追求する成長、すなわち「**インクルーシブ・グロース**」という考え方でした。均一化と効率化を進めたこれまでの経済成長のもとで、「違い」は切り捨てられがちでした。ところが、その「**違い**」を活かすことが可能であり、それこそが、新たなグローバルな価値創造と成長の源泉になると、考え方の方向性が変わったのです。そこにおいて、個々人の個性の違いや、地域の多様性が新たな意味をもってきます。

インクルーシブ・グロースという新しい成長の形は、今後の地球社会に向けた一つの指針となるものです。その具体例として、東京大学の2つの施設を取り上げ、大学と地域の関係から見えるインクルーシブ・グロースについてお話しします。

※このあと、飛騨市神岡町、岩手県大槌町にある二つの研究施設が紹介されていました。

①神岡町は、二つのノーベル賞受賞に結びついたニュートリノ検出の研究所で、観測施設のカミオカンデが設置されているところですが、実は、日本初の公害病イタイイタイ病の原因となった場所でもあったとも紹介されています。

②大槌町は、1973年に、岩手県大槌町に設置された研究施設で、先の東日本大震災では壊滅的な被害を受けながらも直後から調査を続け、現在は地域の水産業の復興などに貢献し、新たな地域への関与の重要性が認識されることにつながったと紹介されています。

(3月24日 令和元年度東京大学卒業式総長告示) 東京大学HPより引用

<https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/schools-orgs/index.html>

皆さんは、まずは、大学に入学してからの学び、研究がどのようなものかを知りたいと思うでしょう。それは当然ではありますが、大学のその先にある実社会と大学がどうつながっているのか、皆さんの将来の「仕事」「生き方」あるいは、「使命」といったものを、それぞれの大学からのメッセージは示唆しています。

是非、この機会に読んでほしいと思います。

(4組担任)